

組織目標評価報告書（平成21年度）

部局名： 資源生物科学研究所

組織目標		達成状況(成果)		
教育	当研究所は、農学(資源生物)系で唯一の大学附置研究所であり、これまでも世界的な研究実績をあげてきた。このような研究成果を教育面でも活かし、全国から大学院生を受け入れ、関連分野の人材育成を図る。また、世界各国から積極的に留学生を受け入れ、英語での指導、講義を通して、世界に通用する若手研究者を育成する。	博士前期課程、後期課程ともに、在籍学生数は前年を上回った。本学からの進学者はほとんどおらず、9割以上が学外からの入学者であり、当研究所の吸引力を十分に示している。1名が休学することになったが、留年者は減少した。		
	達成度: 4 ③ 2 1			
研究	地球環境が悪化する中、食糧を如何に確保するかは、農学に課せられた重大な使命のひとつである。農学系で唯一の大学附置研究所である資源生物科学研究所も、その任を負っており、今後は、国際的な共同利用・共同研究拠点として、その役割を果たす。具体的には、様々な環境ストレス下での食糧生産を可能にするため、資源植物の環境適応性に関する基礎研究を進め、それらの研究成果を応用することにより、ストレス耐性作物の創出と利用を図る。	科研費の申請率、採択率ともに、前年を上回っており、目標に達している。また、外部資金の獲得総額も、受託研究件の増加により過去最高を記録した。研究業績面では、論文数及びインパクトファクター数が大きく増加しており、十分な成果が出ている。これらのことから、十分に組織目標が達せられている。加えて、これまでの研究実績等から、文部科学省から、共同利用・共同研究拠点の認定を受けた。		
	達成度: ④ 3 2 1			
社会貢献	当研究所から情報を積極的に発信し、地域社会との連携を強める。また、共同研究等を通して、新たな産業創出を図る。	前年並みに、研究所公開、公開講座、高校生サイエンス授業などを開催し、社会貢献を行った。さらには、ホームページの充実をはかり、研究所からの社会への情報発信を明確にした。また、屋上緑化事業等から、新たな産学連携プロジェクトが始まり、商品の開発に結びついた。		
	達成度: 4 ③ 2 1			
客観的指標	事項	前年	今年の目標	達成状況
	大学院充足率(修士・博士)(留学生外数)	修・自然7、環境0 博士・自然3(1)、環境0	前年の水準を維持する	修・自然10(2)、環境0 博士・自然6(4)、環境0
	寄付金件数	19年度 18,807,630円 20年度 18,193,000円	前年の水準を維持する	21年度 24,600,000円(申込額)
	科研費申請率	19年度 93,330,000円 20年度 100,074,100円	前年の水準を維持する	21年度 105,816,000円
	科研費採択率	19年度 22.2%(新規) 20年度 15.4%(新規)	前年以上の採択率を目指す	21年度 26.3%(新規)
	共同研究件数	19年度 5,433,000円 20年度 4,690,000円	前年の水準を維持する	21年度 2,750,000円
	受託研究件数	19年度 182,101,490円 20年度 211,525,919円	前年の水準を維持する	21年度 230,963,524円
	留年・休学・退学者数	3人・0人・0人	(今年の状況) 減少に努める	留年1, 休学1, 退学0
論文・出版数(IF)	19年度 124(209.501) 20年度 127(267.874)	前年の水準を維持する	21年度 137(327.671)	
【自己評価総括記述欄】※目標及び指標の達成状況について総括し、次年度に向けた改善点等を記載してください。 教育、研究及び社会貢献のいずれの領域においても、定めた組織目標を達成した。本年度は特に、当研究所のこれまでの卓越した研究実績から、共同利用・共同研究拠点化が文部科学省に認められた。これを受け、研究所全体の改組を計画するとともに、これまでの管理体制について、大幅な見直しを行った。平成22年度からは、拠点化されるため、共同利用・共同研究に関わる新たな事業等に積極的に取り組み、施設、設備等の整備を進める。				

【達成度】 4:非常に優れている 3:良好である 2:概ね良好であるが改善の余地あり 1:不十分であり改善を要する

注)本様式は一般的な学部・研究科用であり、部局の特性に合わせて設定した領域・指標により修正してください。

[組織目標一覧へ](#)